学術論文いま・むかし

理事（研究担当）・副学長　柏倉　幾郎

「巻頭言」大いに悩みましたが、昨年本職就任後間もなく取り組んだ弘前大学研究力調査の過程で感じた大学図書館の多機能な役割と学術論文について自らの乏しい「経験」を交えて述べてみたいと思います。

今から 30 年以上遡る私が大学教員になった駆け出しの頃に､｢学位を取るには自分の背丈以上の論文を読まなければならい」云々の話を聞かされた記憶があります。当時は、学術論文はもとより学術雑誌は「紙媒体」のみで、図書館はこの紙媒体の知の集積庫の役割を担っていました。この話もある意味「紙」という物質量の「かさ」で推し量る事が出来ましたが、その後時代が進むにつれて PDF ファイル等の電子ファイルの利用が進み、今や学術論文はファイルでのやり取りになり、さらには Web 上にのみ存在するようなオープンアクセスジャーナルが登場し、学術論文を取り巻く状況は大きく様変わりしました。かつては、文献を探しに図書館に行き、Current contents や Index Medicus 等の２次検索媒体から必要な論文を探し出し､それを求めて他大学の図書館に出かけたり、所属大学の図書館から複写請求した、という作業はほぼ不要となってしまいました｡今や PC の前から動かずとも必要な情報はほぼ入手可能となり、ある意味大変便利にはなりましたが、一方図書館は遠くなってしまいました。しかしこうした情報探索や収集の経由地が図書館であり、裏を返すと現在の図書館の役割や機能は、建物として存在している以上に多機能になっている事の表れでもあります。

インターネットの普及拡大と通信速度のアップには目覚ましいものがあり、まさに隔世の感があります。私がかつて経験した、手書きや英文タイプで原稿を作成し、ロットリングでの作図、清書原稿と複写原稿を必要部数綴じて、分厚い書留や Air mail で郵送し、返事が来るのを首を長くして待った時代から、ワープロやその後のＰＣの登場による原稿作成作業の効率化とオンライン投稿の拡大でかつてとは大きく様変わりした。今や、投稿にかかる必要項目が増え､苦労して投稿しても、息つく間もなく数日を経ずして「Reject」メールを受け取った時などは大いに力が抜け、立ち直るのに暫し時間がかかる場合もあります。大学院生セミナーでは､ＰＣや iPad で論文ファイルを持参して臨む学生も増えましたが、私の場合やはり学術論文を読む際には慣れもあるせいか印刷して紙媒体という方がどうしてもしっくりくる。余白にメモしたり、蛍光ペンでハイライトしたりという手仕事も含め「読む」という作業には紙を手にした方が圧倒的に馴染みます。今やかつての紙媒体のみの学術論文も急速に電子化が進んでいるが、この電子ファイルの保存も永久にとはいかないようで、やはりこれまでの図書館での「紙」での蓄積も大事に守っていかなければならないと改めて感じています。

これまでの何度かの引っ越しで､かつての「紙」は大幅に減らさざるを得なかったが、思い入れがある論文は捨てられないものもあり、時間を経た「紙｣ならでは重みが手から伝わって来るようで、別の意味で何とも悩ましい限りである。

（かしわくら　いくお）